

「一字金輪」 関係経軌の伝播について

佐々木 大 樹

一、本稿の目的

筆者は、これまで初期密教の実態を解明するため、仏頂尊を中心とする密教系譜について興味を持ち、「仏頂尊勝陀羅尼」の研究に取りくんできた。近年では、仏頂尊に関する研究の一環として「一字金輪」の研究に着手しはじめた¹。一字金輪は、様々な仏頂尊を統べ、その頂点に君臨する主要な尊として知られるが、同尊は大別して《釈迦金輪》と《大日金輪》という二つの側面を有している。

《釈迦金輪》と《大日金輪》は、同じく聖なる *bhrūṃ* 字 (𑖀𑖄) の呪力に由来する尊である。《釈迦金輪》とは、*bhrūṃ* 字の呪力によって転輪聖王の徳を身につけた釈迦のことであり、より原初的な性格を有する一字金輪と考えられる。一方の《大日金輪》とは、『大日経』『金剛頂経』成立以後、その中心尊である法身・大日如来と習合したところの一字金輪であり、その記述は不空金剛 (Amoghavajra : 705 ~ 774) の手による儀軌に集中している。

《大日金輪》については中国成立の可能性が高いと見ているが、一方の《釈迦金輪》は、経典・儀軌の種類・内容ともに充実しており、インドに遡及しうる要素を十分に感じさせる。しかし実際には、サンスクリット・チベット資料中に「*bhrūṃ*」字が僅かに確認されるものの、《釈迦金輪》と同定される資料は現時点で発見されていない²。

このような事情から当面は、一字金輪の資料が豊富な漢訳を中心に研究を進める他ない。しかし、漢訳資料は、インドの原典を忠実に翻訳したもののばかりではなく、中国において増広・編集されたもの、さらには

ほぼ中国で製作されたものまで幅があり、資料の扱いには注意を要する。

本稿では、このような見地から、これから「一字金輪」の研究を進めて行くのに先立ち、基礎作業として中国で各時代に編纂された經典目録の記述を精査し、一字金輪の関連経軌の成り立ちや性質を見極めることを目的としたいと思う。

二、「一字金輪」関係経軌と經典目録

本稿において「一字金輪」関係経軌として、取り上げるのは以下の資料である。便宜上、《釈迦金輪》に関係する**①～⑥**、《大日金輪》に関係する**①～⑧**に大別し、おおよその成立順、漢訳年次順を考慮して配列した。

《釈迦金輪》の関係経軌

- ① 宝思惟『大陀羅尼末法中一字心呪經』全一卷（大正蔵 №956）³
- ② 菩提流志『五仏頂三昧陀羅尼經』全四卷（大正蔵 №952）⁴
- ③ 菩提流志『一字仏頂輪王經』全五卷（大正蔵 №951）⁵
- ④ 不空『菩提場所説一字頂輪王經』全五卷（大正蔵 №950）⁶
- ⑤ 不空『一字奇特仏頂經』全三卷（大正蔵 №953）⁷
- ⑥ 不空『宝悉地成仏陀羅尼經』（大正蔵 №962）

《大日金輪》の関係経軌

- ① 不空『一字頂輪王念誦儀軌』全一卷（大正蔵 №954A）⁸
- ② 不空『一字頂輪王念誦儀軌』全一卷（大正蔵 №954B）⁹
- ③ 不空『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』全一卷（大正蔵 №955）
- ④ 不空『金輪王仏頂要略念誦法』全一卷（大正蔵 №948）¹⁰
- ⑤ 不空『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』全一卷（大正蔵 №957）¹¹

- ⑥ 『大日如来剣印』全一卷（大正蔵 №864A）
- ⑦ 『奇特最勝金輪仏頂念誦儀軌法要』全一卷（大正蔵 №949）
- ⑧ 『金剛頂経一字頂輪王儀軌音義』全一卷（大正蔵 №958）

次に本稿で、「一字金輪」関係経軌について、その来歴や翻訳状況を調べるのに用いた経典目録等を、資料の編纂年次順に記すと以下である。

- ① 智昇撰『開元釈教録』（大正蔵 №2154：開元録）
開元十八年（730）頃
- ② 智昇撰『開元釈教録略出』（大正蔵 №2155：開元録略出）
開元十八年（730）頃
- ③ 円照集『代宗贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』
（大正蔵 №2120：表制集）
卷三「三朝所翻経請入目録」（自撰録）大暦六年（771）
- ④ 円照集『大唐貞元統開元釈教録』（大正蔵 №2156：統開元録）
貞元十年（794）
- ⑤ 円照撰『貞元新定釈教目録』（大正蔵 №2157：貞元録）
貞元十六年（800）
- ⑥ 慧琳撰『一切経音義』（大正蔵 №2128）¹²
建中年間（780～783）～元和二年（807）
- ⑦ 希麟集『統一切経音義』（大正蔵 №2128） 梁代（907～923年）

三、経典目録等における「一字金輪」関係経軌の記述一覧

まず経典目録等①～⑦に収録される「一字金輪」関係経軌の諸記録を一覧表で示すと次のとおりである。この表をもとにして、以下、宝思惟と菩提流志、そして不空というように漢訳者単位で、「一字金輪」関係経軌の伝播、翻訳状況を整理してゆきたいと思う。

【表 1】「一字金輪」関係経軌の経録記事と中国への伝播状況

	開元録	開元録略出	表制集	統開元録	貞元録	一切経音義	統一切経音義
宝思惟『大陀羅尼末法中一字心呪経』 ⊕ №956	55.566c 55.603a 55.669b 55.687b 55.710c	55.732c			55.867b 55.934c 55.1009b 55.1033c	54.542b	
菩提流志『一字頂輪王経』 ⊕ №951	55.569c 55.603a 55.669c 55.687b 55.710c	55.732c			55.872b 55.934c 55.1009c 55.1033c	54.539c	
菩提流志『五頂三昧陀羅尼経』 ⊕ №952							
不空『菩提場所説一字頂輪王経』 ⊕ №950	55.699c		52.839b	55.749a 55.767a	55.772b 55.879b 55.931b 55.1011c 55.1031c	54.541b	54.956b
不空『一字奇特頂輪王経』 ⊕ №953	55.699c			55.748c 55.766c	55.772a 55.879b 55.931b 55.1011c 55.1031c	54.539a	54.955c
『大日如来剣印』 ⊕ №864A							
不空『金輪王頂要略念誦法』 ⊕ №948				55.754a 55.768c	55.773b 55.881a 55.934c 55.1012a 55.1033c		
『奇特最勝金輪頂念誦儀軌法要』 ⊕ №949							
不空『一字頂輪王念誦儀軌』 ⊕ №954A	55.700b		52.839c	55.749b 55.767c	55.772c 55.880a 55.934c 55.1033c		54.962a
不空『一字頂輪王念誦儀軌』 ⊕ №954B							
不空『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』 ⊕ №955			52.839c	55.749b 55.767c	55.772c 55.880a 55.934c 55.1012a 55.1033c	54.584b	
不空『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』 ⊕ №957				55.753c 55.768b	55.773a 55.880c 55.931b 55.1011c 55.1031c		54.961c

四、宝思惟・菩提流志と「一字金輪」関係経軌の訳出

宝思惟（梵名 Mañicinta、生年不詳～693～721）と菩提流志（梵名 Bodhiruci、572?～727）は、初唐～盛唐期に活躍した僧であり、ともに釈迦金輪に関係する重要な経典を翻訳している¹³。

- ① 宝思惟『大陀羅尼末法中一字心呪経』（大正蔵 №956：一字心呪経）
- ② 菩提流志『五仏頂三昧陀羅尼経』（大正蔵 №952：五仏頂経）
- ③ 菩提流志『一字仏頂輪王経』（大正蔵 №951：一字仏頂経）

中国では、数多くの経典目録が編纂されたが、最も早く一字金輪（釈迦金輪）の資料を収録したのは、730年頃に編纂された^a『開元録』であった。本目録中では、①宝思惟『大陀羅尼末法中一字心呪経』、そして菩提流志訳として『一字仏頂輪王経』の二経の名が挙げられているので、まず両経の記述を整理しておきたい。

◎宝思惟『大陀羅尼末法中一字心呪経』

本経は、^a『開元録』において5箇所而言及されるが、その中でも最も詳細な情報を提示するのは最初の箇所である¹⁴。その箇所では、まず宝思惟の訳経として7部9巻を並べる中に、「大陀羅尼末法中一字心呪経一卷」と記し、割注で「神龍元年於大福先寺譯李無諂譯語」の情報を補っている。宝思惟は、神龍元年（705）に大福先寺において、李無諂（梵名・生没年不詳）の手助けを受けながら本経を漢訳したことが記されている。

^a『開元録』では、続いて「沙門阿儻眞那」（Mañicinta）として宝思惟の略伝が記録されている¹⁵。宝思惟は、北インド・カシュミール（迦濕蜜羅國：Kashmir）出身のクシャトリア（刹帝利種）で、王族出身者であった。幼年の頃に出家をして、仏道修行に励み、具足戒に専精し、人並み外れた智慧をもって真俗をよく理解し、また呪術にも優れたという。その宝思惟が、人々を化導したいとの念から、郷国カシュミールを

離れ、長寿二年（693）に武則天（624～704）が建てた武周の都・洛陽に到達し、まず天宮寺に滞在した。これより神龍元年（705）までの14年間で宝思惟は、授記寺・天宮寺・福先寺等の諸寺に滞在し、本経を含む7部9巻の經典を漢訳した。またこの間、他の訳経場にも参画し、例えば、義浄（635～713）による訳経では、しばしば「證梵文義」の役割を担ったと記録されている¹⁶。しかし、神龍元年以降になると、宝思惟は訳経事業から離れ、龍門山に天竺という名の寺を築いて修行に専心し、開元九年（721）に百余歳で命終したと記録される。

宝思惟による7部9巻の漢訳において注目すべきことは、ほぼ全てにおいて李無諂が、主要な立場で関わっていたという事実である。①『開元録』中、『不空絹索陀羅尼經』（大正蔵 №1096）の項目で、李無諂の略伝が掲載されている¹⁷。李無諂は、北インドの「嵐波國」（Laghman：カーピシ国の属領¹⁸）出身の婆羅門であり、聡明で内外の事情、また唐語・梵語の両言語にも精通していたという。李無諂は、自ら訳経する傍ら、宝思惟や菩提流志が經典を漢訳する際に、しばしば「度語」（＝訳語：通訳者¹⁹）等を担って訳経に従事したと記録される。宝思惟・菩提流志は、ともに釈迦金輪の經典を漢訳しており、互いに人的交流があり、また影響関係があったものと推測されるが、その両僧をつなぐ存在として李無諂の立ち位置は重要である²⁰。

本経を含む宝思惟の訳経7部9巻は、睿宗の太極元年（712）4月に張齊賢等によって繕写（乱れや誤りを正し清書する）された後に宮廷内に献上され、勅令によって同年（延和元年：712）6月に精査を経て目録に入れられたと記録されている。その後、漢訳された本経は、敦煌にも伝播したようであり、「一字金輪」関係経軌の中では唯一、敦煌出土の資料中に現存が確認される²¹。

◎菩提流志『一字仏頂輪王經』

本経もまた、①『開元録』において5箇所而言及されるが、その中でも最も詳細な情報を提示するのは最初の箇所である²²。その箇所では、

まず菩提流志の訳経として53部111巻を列記し、その一つに「一字佛頂輪王經五卷」を挙げ、続く割注で「亦云五佛頂(*經)或四卷景龍三年夏於西崇福寺譯弟子般若丘多助宣梵本其年冬譯畢」という情報を補足している。これによれば、本経は景龍三年(709)の夏から冬にかけて、西崇福寺において弟子の般若丘多の手助けのもと梵本から漢訳したものであり、『五仏頂経』という別称、また四巻本の伝承があったことが分かる。

③『開元録』では、続いて「菩提流志」の略伝が記録されている²³。菩提流志は、南インド出身の婆羅門で、「迦葉」(kāśyapa)の名を受け継ぐ家系であった。本名は「達摩流支」(Dharmaruci:漢名「法希」)であったが、武則天の意向によって「菩提流志」(Bodhiruci:漢名「覺愛」)に改称したようである。

12歳の頃、菩提流志は、外道の教えにしたがって出家し、「波羅奢羅」(Prašaraか)に師事し、声明や数論(sāṃkhya)をはじめ、陰陽・暦数や地理・天文・呪術・医学等の諸学に通じたという。菩提流志は、60歳の時に、大乘・上座部の「耶舍瞿沙」(梵名・生没年不詳)という仏教僧との論議を通じて仏教に目覚め、転向し、5年以内に三蔵の全てに通達した。その名声は中国にまで伝わり、その招聘を受けて長寿二年(693)に中国に到った。菩提流志は、洛陽の仏授記寺や大周東寺等を拠点として、53部111巻もの経典を漢訳し、その集大成として神龍二年(706)から8年間をかけて『大宝積経』(大正蔵№310)を完成させた。以後は訳経から離れ、誦経等に専心し、開元15年(727)の11月5日に156歳で入滅したと伝えられる。

菩提流志の訳経事業を支えたインド・中国の僧の名も数多く記録されているが、その中には、宝思惟の訳経にも従事した北インド出身の婆羅門僧・李無諂の名も見える²⁴。また本稿の主題である④『一字仏頂輪王経』は、『大宝積経』と並行して訳経が行われたようであり、その時に「助宣梵本」として重要な位置を担ったのが般若丘多(梵名・生没年不詳)であった²⁵。

經典目録の記述に依るかぎり、菩提流志による本經翻譯は一度のみであるが²⁶、『大正新脩大藏經』には、②『五仏頂三昧陀羅尼經』（大正藏 №952）と③『一字仏頂輪王經』（大正藏 №951）という2種が収録されている。両經は「同本異訳」とされ、内容面・訳語面において酷似するものであるが、②『五仏頂三昧陀羅尼經』は四卷本、③『一字仏頂輪王經』は五卷本という差異が存している。すなわち③『一字仏頂輪王經』では、他訳②および④にはない、「大法壇品第八」という特異な一品を卷第四として加え、五卷本に仕立てられているのである。

しかし、すでに拙論で指摘したように²⁷、③の「大法壇品第八」の記述は、先行する『陀羅尼集經』卷一・卷四と酷似しており、梵文からの直訳ではなく、『陀羅尼集經』等をもとに中国以降で編集され加えられた一品である可能性が高い。

古今の説の中には²⁸、③『一字仏頂輪王經』が先にあり、後人の手によって編集され②『五仏頂三昧陀羅尼經』ができたとの説もあるが、「大法壇品第八」の編集的性格を考慮するならば、四卷本にあたる内容こそがインドに遡及しうるものであり、現行資料中では③よりも、②の方が初訳である蓋然性が高い。

①『開元録』中では、くり返し「一字佛頂輪王經五卷」、そして割注として「亦云五佛頂經或四卷」と述べており、菩提流志による漢訳（709年）から、わずか21年後の開元十八年（730）までには、すでに四卷本にもとづき「大法壇品第八」が増広されて、五卷本が成立し、それぞれ②および③の両經典が併存した状況が窺われる。

以上、宝思惟と菩提流志という僧を中心に、主要な《釈迦金輪》に関する經典の訳経事情を探ってきた。その結果、神龍元年（705）に①『大陀羅尼末法中一字心呪經』、景龍三年（709）に「一字仏頂輪王經」の四卷本が訳され②となり、さらに開元18年（730）までに五卷本へと増広され③が成立したものと推測される。

《釈迦金輪》に関する①②③の三經典は、8世紀前半の25年という極

めて短期に漢訳されたものであり、訳者もまた洛陽の寺院を拠点とした宝思惟と菩提流志という二人の僧であった。宝思惟と菩提流志には前述の通り、李無諂という共通の知人がおり、宝思惟と菩提流志には交流があり、影響を与え合う関係であった可能性は高く、何らかの共通認識のもと《釈迦金輪》に関する経典を集中的に訳出したものとも推測される。《釈迦金輪》の経典は、梵本・チベット訳が現存しないことから、中国で作成、あるいは編集された経典である可能性も視野に入れ、今後内容面からの検証を重ねてゆきたい。

五、不空と「一字金輪」関係経軌の訳出

不空金剛（Amoghavajra：705～774）は、唐代に活躍した四大翻訳家の一人に数えられる密教僧であり、いわゆる『金剛頂経』『理趣経』等の主要な密教経典を翻訳し、特に金剛頂系の密教を敷衍した僧として有名である。不空の生涯・功績については、十分な研究蓄積があり²⁹、本稿では紙数の都合上、「一字金輪」に関する事績にしばらく論述してゆきたい。

不空は、インド・スリランカでの密教受法後、天宝五載（746）に長安に帰還し、以降、大興善寺等を拠点として訳経を行い、その数は110部143巻に及ぶと記されている（◎『貞元録』）。不空の訳経は、金剛頂系の経軌が主体であるが、その中には《釈迦金輪》および《大日金輪》に関する経軌として6部12巻が含まれており、仏頂系の密教もまた重視した傾向が読み取られる³⁰。

◎『貞元録』には、不空の行状が簡潔に記録されるが³¹、その中に「一字金輪」関係経軌の訳出に関する記述が出てくる。その記録に依れば、不空は、天宝十二載（753）に西平郡王の哥舒翰の要請を受け、武威の開元寺において『金剛頂経』（大正蔵 №865）とともに、《釈迦金輪》に関する④『菩提場所説一字頂輪王経』（大正蔵 №950）³²、そして《大日金輪》に関する①②『一字頂輪王念誦儀軌』（大正蔵 №954）³³、およ

び③『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』（大正蔵 №955）を翻訳したとされる³⁴。

このような記述に対応して、不空自ら撰述した大暦六年（771）の「三朝所翻經請入目錄」（通称「自撰録」：◎『表制集』卷三所収³⁵）では、不空の訳経として77部101巻を挙げるが、そのうち関係経軌として、「菩提場所説一字頂輪王經五卷」「一字頂輪王瑜伽經一卷」「一字佛頂輪王念誦儀軌一卷³⁶」の3部7巻を収めており、不空の手による確実な資料と考えられる。

次に①『開元録』であるが、同目錄中には、不空没後の興元元年（784）、正覚寺で編纂された「大唐不空三藏新譯衆經論及念誦儀軌法等目錄³⁷」が含まれている。そこでは不空の訳経として103巻を挙げ、「一字金輪」に関係する経軌として三部が収録されている。同目錄では、すでに翻訳されていたであろう③『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』の名が何故か欠落し、その代わりに「一字奇特佛頂經三卷六十八紙³⁸」が初めて収録されている。これは《釈迦金輪》に関する⑤『一字奇特仏頂經』（大正蔵 №953）と比定されるものであり、おそらく不空は、771～774年の最晩年になって訳出した経と考えられる。

次に貞元十年（794）に編集された④『続開元録』では、◎『表制集』の自撰録を踏まえ³⁹、前に取り上げた経軌4部10巻を挙げている。その上で◎『表制集』以後の記録として、大暦九年（774）、6月15日の上表を挙げ⁴⁰、新たに「金剛頂經一字頂輪王成佛儀軌一卷 八紙⁴¹」「金輪王佛頂略念誦法一卷 三紙⁴²」という二種の「一字金輪」に関する儀軌名を挙げている。いずれも《大日金輪》に関する⑤『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』（大正蔵 №957）、④『金輪王仏頂要略念誦法』（大正蔵 №948）であり、771～774年の最晩年になって訳出されたものと推測される。

同目錄では、他箇所でも不空の訳経リストが掲げられており、その訳経名中には割注でいくつかの興味深い補足がなされている⁴³。特に「一字頂輪王瑜伽經一卷」の割注では、「経内に瑜伽（yoga）翳迦訖沙羅（ekākṣara：一字）烏瑟尼沙（uṣṇīṣa：頂）斫訖囉（cakra：輪）眞言安怛

陀那（antardhāna：隠形）儀則一字頂輪王瑜伽經と云う」（※以上、括弧中の梵語と意味は筆者による推定）という記述がなされており、漢訳「一字仏頂」あるいは「一字金輪」の原語（梵語）が、ekākṣaroṣṇīṣacakra である可能性を示唆している⁴⁴。

同じく円照によって貞元十六年（800）に編纂された㊟『貞元録』では、以前の經典目録の記述を集約し、第一・十五等で不空所訳のリストを挙げるが⁴⁵、新たな情報を含む記述は見当たらない。

經典目録の他には、音義関係の資料中において、不空所訳の「一字金輪」の経軌について言及がなされている。まず建中年間末から元和二年（807）頃にかけて成立⁴⁶されたと推定されている㊦『一切経音義』（大正蔵 №2128）では、「一字奇特佛頂經」（大正蔵 54.539a～）、「菩提場所説一字頂輪王經」（大正蔵 54.541b～）、「瑜伽一字佛頂輪王安怛袒那法經」（大正蔵 54.584b～c）の三種が挙げられ、難解な用語・梵語の音および意味について注釈している。前二種は《釈迦金輪》に関わる㊧『菩提場所説一字頂輪王經』（大正蔵 №950）および㊨『一字奇特仏頂經』（大正蔵 №953）であり、後一種は㊟『貞元録』を参照するかぎり《大日金輪》に関する㊩『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』（大正蔵 №955）と判断される。

また前音義の続編として梁代（907～923年）に編纂された㊪『統一切経音義』では、「一字奇特佛頂經」（大正蔵 54.955c～）、「菩提場所説一字頂輪王經」（大正蔵 54.956b～）、「金剛頂經一字頂輪王念誦儀一卷」（大正蔵 54.961c～）、「一字頂輪王念誦儀軌一卷」（大正蔵 54.962a～）の四種を挙げて注釈を行っている。

以上、不空の所訳を概観してきたが、生涯における訳出傾向を見ると、771年から774年の最晩年に至り、㊫不空『一字奇特仏頂經』（大正蔵 №953）、㊬『金輪王仏頂要略念誦法』（大正蔵 №948）、㊭『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』（大正蔵 №957）という「一字金輪」関係経軌を次々に訳出（編集の可能性もある）した点は特に注

目される。同時期の訳経には、④⑤のように、従来の「一字仏頂輪王」という訳語に代わり、インドの理想的王である転輪聖王 (cakravartirājan) の呼称の一つである「金輪王」の語が用いられている⁴⁷。最晩年に「一字金輪」の経軌が相次ぎ翻訳された背景として皇帝を転輪聖王・金輪王に擬え、密教による護国を目指した不空の政治的意図が予想されるが、この問題については、今後の検討課題としたい⁴⁸。

また本稿の冒頭において、《大日金輪》の関係経軌として8種の儀軌を挙げたが、そのうち5種は不空訳とされ、3種は中国の經典目録に記載がなく訳者不詳である。漢訳以外の資料がないことも含めて勘案するならば、《大日金輪》の始まりは全て不空に帰着するのであり、不空によって大日如来と一字金輪とが習合され、中国において《大日金輪》なる尊格が成立した可能性が考えられる。

六、奈良期における「一字金輪」関係経軌の伝播と受容

これまで中国の經典目録を手掛かりに、宝思惟・菩提流志・不空金剛における「一字金輪」関係経軌の訳出状況を精査してきた。以下、中国で訳出された経軌がいつ、誰によって日本に将来されたのか、奈良期・平安期に区切って検証してゆきたい。なお日本に伝来した経軌の中には、中国の經典目録に記載がなく、また現存も不明な新出資料も少なからず含まれている。

まず奈良期における「一字金輪」関係経軌の受容状況を探りたい。木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引⁴⁹』では、①『大陀羅尼末法中一字心呪経⁵⁰』(大正蔵 №956)、②『五仏頂三昧陀羅尼経⁵¹』(大正蔵 №952)、③『一字仏頂輪王経⁵²』(大正蔵 №951)の三種が挙げられている。いずれも《釈迦金輪》に関係する経軌であり、宝思惟・菩提流志による8世紀前半の訳経成果を反映したものと見えるであろう。

ここで注目すべきことは、②『五仏頂三昧陀羅尼経』と③『一字仏頂

輪王経』とを区別している点である。前述の通り、①『開元録』が編纂された開元十八年（730）頃には、すでに②③と関わる四巻本と五巻本が併存したようであるが、「一字佛頂輪王経五巻」の割注として「亦云五佛頂経或四巻」と記すことから、基本的に同一の経典と認識されていたと考えられる。それが奈良期に日本に伝播した時点で、②と③は別個の経典として扱われたようであり、後に『大正蔵経』でも別々の経典として収録されたものと考えられる。

七、平安期における「一字金輪」関係経軌の受容

平安期には、入唐八家（常暁を除く）によって様々な「一字金輪」関係経軌が相次いで将来されたが、その中には、中国の経典目録には収録されない資料名も挙げられている。まず入唐僧による請来状況を整理すると下表のようになる。なお入唐八家によって請来された仏典の総目録である安然集『諸阿闍梨真言密教部類総録』（大正蔵 №2176）についても参考までに表の中に示した⁵³。

◎最澄（767～822）の請来

最澄の請来目録としては、延暦二十四年（805）に著された『伝教大師将来台州録⁵⁴』（大正蔵 №2159）と『伝教大師将来越州録』（大正蔵 №2160）の二種が知られる。このうち后者は、最澄が中国越州竜興寺に滞在した時に書写した仏典の目録であり、数多くの密教資料を含み、四種の「一字金輪」関係資料の名を見出すことができる。

「五佛頂轉輪王経」（大正蔵 55.1058b）

「一字頂輪王瑜伽法一卷」（大正蔵 55.1058b）

「金輪佛頂像様一卷」（大正蔵 55.1058c）

「一字轉輪三印一卷」（大正蔵 55.1058c）

一つ目の「五佛頂轉輪王経」は、すでに奈良期に請来されていた②『五仏頂三昧陀羅尼経』（大正蔵 №952）に該当するものと考えられる。

【表2】「一字金輪」関係経軌の記録と日本への伝播状況

	正倉院文書	最澄	空海
宝思惟『大陀羅尼末法中一字心呪経』 ㊦ №956	㊦ 74・111 ㊩ 281・325 ㊪ 87・125・446・495 ㊫ 131 ㊬ 468 ㊭ 343 ㊮ 381 ㊯ 166・198 ㊰ 38・101 ㊱ 542 ㊲ 397		
菩提流志『一字仏頂輪王経』 ㊦ №951	㊩ 281・325 ㊪ 87・446 ㊫ 131 ㊬ 171 ㊭ 37・101		
菩提流志『五仏頂三昧陀羅尼経』 ㊦ №952 (※=五仏頂輪王経)	㊦ 62 ㊪ 125 ㊫ 32・70 ㊬ 388 ㊭ 166・205 ㊮ 542 ㊯ 397 ㊰ 381 ㊱ 213	55.1058b	
不空『菩提場所説一字頂輪王経』 ㊦ №950			55.1061b 55.1066b
不空『一字奇特仏頂経』 ㊦ №953			55.1066a
『大日如来剣印』㊦ №864A			
不空『金輪王仏頂要略念誦法』 ㊦ №948			55.1062b 55.1066c
『奇特最勝金輪仏頂念誦儀軌法要』 ㊦ №949			
不空『一字頂輪王念誦儀軌』 ㊦ №954A			55.1061b 55.1063c *梵字
不空『一字頂輪王念誦儀軌』 ㊦ №954B			55.1066a 55.1068a *梵字
不空『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』 ㊦ №955		55.1058b	55.1061b 55.1066a
不空『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切 時梵念誦成仏儀軌』 ㊦ №957			
『金剛頂経一字頂輪王儀軌音義』 ㊦ №958			

「一字金輪」関係経軌の伝播について

円行	円仁	恵運	円珍	宗叡	安然
					55.1118c 最澄
					55.1118c
					55.1118b
	55.1080b		55.1096a 55.1097c 55.1103b		55.1118c 空海・円仁・円珍
	55.1080b		55.1096a 55.1097c 55.1103a		55.1118c 空海・円仁・円珍
	55.1078c	55.1090a	55.1096c 55.1098b 55.1104a		55.1118b 空海・円仁・恵運・ 円珍
55.1072a	55.1081a	55.1089a			55.1118c 恵運・円仁・円行
55.1072b	55.1079c	55.1088a 55.1089c	55.1096b 55.1097c 55.1103b		55.1118c 空海・最澄・円行・ 円仁・恵運・円珍
	55.1079c		55.1096b 55.1097c 55.1103b	55.1110b	55.1118c 空海・円仁・円珍
	55.1079b		55.1096c 55.1098b 55.1103c		55.1118c 円仁・円珍

次の「一字頂輪王瑜伽法」は、おそらく不空訳の③『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』(大正蔵 №955)であり、新請来の資料と考えられる。

残りの「金輪佛頂像様」と「一字轉輪三印」という両資料は、中国の經典目録にはない謎の資料であり、現存も不明である。前者の資料は、名称から推測するならば、一字金輪に関する図像資料であり、『大正蔵經』図像部に多く収録される同尊の別尊曼荼羅のいずれかの原型である可能性も考えられる。

◎空海(774～835)の請来

空海が大同元年(806)に著した入唐目録である『御請来目録』(大正蔵 №2161)には、「一字金輪」関係資料として五種の名が見出される。

「^{マテ}菩卷場所説一字頂輪王經五卷七十八紙」(大正蔵 55.1061a)

「一字頂輪王瑜伽經 一卷 十二紙」(大正蔵 55.1061b)

「一字仏頂輪王念誦儀軌 一卷 十二紙」(大正蔵 55.1061b)

「金輪王仏頂略念誦法 一卷 三紙」(大正蔵 55.1062b)

「梵字一字頂輪王儀軌一卷」(大正蔵 55.1063c)

最初の四本は順に、④『菩提場所説一字頂輪王經』(大正蔵 №950)、③『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』(大正蔵 №955)、①②『一字頂輪王念誦儀軌』(大正蔵 №954)、④『金輪王仏頂要略念誦法』(大正蔵 №948)と推測される。いずれも不空訳の經軌であることが注目される。

最後の資料「梵字一字頂輪王儀軌」については、『大正蔵經』に未収録であるが、『三十帖策子』中に該当すると目される梵字資料が収録されている(後述)。

次に『三十帖策子』について取り上げたい。『三十帖策子』は、空海が入唐時、師恵果から受けた密教經軌を唐写經生の助けのもと書写した資料であり、仁和寺に所蔵され、現在は国宝に指定されている。同書の原本の影印資料を参照すると、「一字金輪」関係資料として下記のごとく5種の經軌が見いだされる。

第五帖「一字頂輪王念誦儀軌」

「瑜伽翳訖沙囉烏瑟尼沙斫訖囉眞言安怛陀那儀則一字頂輪王
瑜伽經」

第九帖「五佛頂三昧陀羅尼經」

第十七帖「金輪王佛頂要略念誦法」通諸頂佛

第二十九帖「一字頂輪」

最初の「一字頂輪王念誦儀軌」は、冒頭が「我今依怛利天…」から始まっており、現行のものでは①『一字頂輪王念誦儀軌』（大正蔵 №954A）と判断される。前に取り上げた中国の經典目録では、「一字頂輪王念誦儀軌」と記されるのみで、大正蔵 №954A であるか、大正蔵 №954B であるのか判然としなかったが、同書を検討したかぎり前者が当初の不空訳の儀軌である可能性が高い。

次の「瑜伽翳訖沙囉烏瑟尼沙斫訖囉眞言安怛陀那儀則一字頂輪王瑜伽經」は、③『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』（大正蔵 №955）に一致するが、その儀軌名については、前述の④『続開元録』に記された名称が採用されている。

「五佛頂三昧陀羅尼經」は②『五仏頂三昧陀羅尼經』（大正蔵 №952）、次の「金輪王佛頂要略念誦法」通諸頂佛は④『金輪王仏頂要略念誦法』（大正蔵 №948）に該当する。

最後の「一字頂輪」とは、直前でも言及した、いわゆる梵字の「一字頂輪王儀軌」であり、①②『一字頂輪王念誦儀軌』（大正蔵 №954）冒頭に収録される漢字音写の眞言と一致している。これらの梵字眞言の詳細は不明であるが、空海が師恵果から儀軌伝授に付随して継承したものである可能性が考えられる。『大正蔵経』に未収録であるため、試みに梵字眞言のローマライズを翻刻すると以下の通りである。

*oṃ jinajik

oṃ ārolik

oṃ vajradṛk

namaḥ samantabuddanāṃ apratihataśāsanānāṃ…

oṃ cakravarttipraśamitārdrārābhasmacchaloṣṇīṣa rakṣa rakṣa māṃ hūṃ

phaṭ svāhā

kavacamantraḥ*

nama samantabuddhānāṃ oṃ ru ru sphurujvala tiṣṭhā siddhalocane

sarvārthasādhanisvāhā *

oṃ vimalodadhi hūṃ

oṃ acala hūṃ *

namaḥ samantabuddhānāṃ oṃ…

最初の三種の真言は、『蘇悉地經』等に見られる三部心三昧耶真言（仏部心・蓮華部心・金剛部心）、次はおそらく結網槪の真言（※冒頭部のみ）、次は甲冑の真言、次は仏眼の真言である。次の真言からは、いわゆる道場観に関連するものであり、順に大海、須弥山、七宝楼阁を観想する真言であるが、最後の七宝楼阁の真言は「oṃ」で途切れ、以降の諸真言も欠落し、また順番の交錯がある等、不完全な梵字次第である。

以上、『三十帖策子』中の「一字金輪」関係経軌を抽出して検討してきたが、先行研究によれば、仁和寺に所蔵される原本は、空海が唐より将来所持した原型とは異なることが指摘されている⁵⁵。『大正蔵經』第五十五卷には、『根本大和尚真跡策子等目録』という延喜十八年（918）に記された『三十帖策子』の目録が収録されるが、仁和寺所蔵の原本とは多少の相違が見られる。すなわち、経軌の名称が異なるのみならず、②『五仏頂三昧陀羅尼經』（大正蔵 №952）の代わりに④『菩提場所説一字頂輪王經』（大正蔵 №950）が入録し、また原本にない⑤『一字奇特仏頂經』（大正蔵 №953）の名が加えられており、空海の実際の請来については一層の精査が必要である⁵⁶。

以上、空海の請来した「一字金輪」関係資料について見てきたが、そのほぼ全てが不空の所訳であり、空海は恵果を通じて、不空の密教を忠実に継承したことが窺われる。しかし、不空訳の中でも唯一、『大日金輪』に関する⑤『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』（大正蔵 №957）のみは目録中に見出すことはできない。同儀軌は、空海が

『即身成仏義』において即身成仏の証文の一つに挙げた重要なものであり⁵⁷、なぜ諸目録類に収録されなかったのかは謎である⁵⁸。今後の課題としたい。

◎円行（799～852）の請来

円行は入唐目録として承和六年（839）に『靈巖寺和尚請来法門道具等目録』（大正蔵 №2164）を記したが、その中には下記の一文字金輪に関する請来品名が収載される。

「奇特最勝金輪佛頂念儀軌一卷」（大正蔵 55.1072a）

「一字頂輪王念誦儀軌一卷^{依切利天王宮會所説經譯}」（大正蔵 55.1072b）

「金輪佛頂輪王像一軀」（大正蔵 55.1073b）

最初の「奇特最勝金輪佛頂念儀軌」は、新請来にして訳者不詳の⑦『奇特最勝金輪仏頂念誦儀軌法要』、また「一字頂輪王念誦儀軌」は割注の「依切利天王宮會」という表現から、空海請来と同様の①『一字頂輪王念誦儀軌』（大正蔵 №954A）と判断される⁵⁹。最後の「金輪佛頂輪王像一軀」は、一字金輪の仏像と解されるが現存を含め、一切不明である。

◎円仁（794～864）の請来

円仁の請来目録として『日本国承和五年入唐求法目録⁶⁰』（大正蔵 №2165）、『慈覚大師在唐送進録⁶¹』（大正蔵 №2166）、『入唐新求聖教目録』（大正蔵 №2167）の三種が知られるが、最後の目録に多くの「一字金輪」関係資料が収載される⁶²。なお同目録は、円仁が長安・五臺山・揚州で収集した仏典目録であり、不空の訳経が多いことが特徴である。

「金輪王佛頂要略念誦法一卷^{讀樂體}」（大正蔵 55.1078c）

「金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌一卷^{不空}」（大正蔵 55.1079b）

「一字頂輪王瑜伽經一卷^{不空}」（大正蔵 55.1079c）

「一字頂輪王念誦儀軌一卷^{不空}」（大正蔵 55.1079c）

「一字奇特佛頂經三卷^{不空}」(大正蔵 55.1080b)

「菩提場所説一字頂輪王經五卷^{不空}」(大正蔵 55.1080b)

「奇特最勝金輪佛頂念誦儀軌法要一卷」(大正蔵 55.1081a)

「梵字五佛頂眞言一本」(大正蔵 55.1082a)

「一字頂輪佛頂要法別行一卷」(大正蔵 55.1083a)

上記の経軌はほぼ不空訳であり、すでに請来されたものが主だが、二番目の⑤『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』(大正蔵 №957)は、記録上の新請来である。同儀軌が『即身成仏義』の成立に関わることは前に述べたとおりである。

最後の二本「梵字五佛頂眞言」と「一字頂輪佛頂要法別行」は、いずれも中国の經典目録に記載のない資料であり、詳細は不明である。

◎惠運(七九八～八六九)の請来

惠運は、承和十四年(847)に『惠運禪師将来教法目録』(大正蔵 №2168A)と『惠運律師書目録』(大正蔵 №2168B)という二種の入唐目録を著したが、前者に比べて後者の目録は大幅に増広されている。後者の目録から「一字金輪」関係経軌を抽出すると下記の通りである。

「奇特^{ママ}最初^(*勝)金輪佛頂念誦儀軌法要一卷」(大正蔵 55.1089a)

「一字頂輪王念誦儀軌一卷^{依切利天宮所説經譯}」(大正蔵 55.1089c)

「金輪^{ママ}(*剛)五佛頂略念誦法通一切佛頂尊同用一卷」(大正蔵 55.1090a)

「金輪^{ママ}(*剛)佛頂抄一卷」(大正蔵 55.1091a)

「五佛頂曼荼羅禎子苗一鋪」(大正蔵 55.1091c)

最初の三本は、いずれもすでに請来された経軌と目される。三番目の念誦法は、「王」が「五」に代わり、先行する目録で割注の情報であった「通諸頂佛」の言が、多少変更されて資料名の一部になったと目されるが、おそらく④『金輪王仏頂要略念誦法』(大正蔵 №948)に該当すると思われる。

最後の二本、「金輪佛頂抄」と「五佛頂曼荼羅禎子苗」は、何らかの一字金輪に関する抜き書きと、同尊に関する軸装の図像資料と目される

が詳細は不明である。

◎円珍（814～891）の請来

円珍の入唐目録として、『開元寺求得経疏記等目録⁶³』（大正蔵 №2169）、『福州温州台州求得経律論疏記外書等目録⁶⁴』（大正蔵 №2170）、『青龍寺求法目録⁶⁵』（大正蔵 №2171）、円珍撰『日本比丘円珍入唐求法目録⁶⁶』（大正蔵 №2172）、円珍撰『智證大師請来目録』（大正蔵 №2173）の五種が知られている。このうち「一字金輪」関係経軌を多く収録するのは『青龍寺求法目録』であるが、これは円珍が長安・青龍寺において法全（青年不詳～841～859～没年不詳）から授けられた仏典の目録であって不空の所訳が主であり、空海請来とほぼ同じである。前四種の総目録である『智證大師請来目録』を中心に、「一字金輪」関係経軌を挙げると下記の通りとなる。

「一字王眞言一本」（大正蔵 55.1094a ※大正蔵 №2169 目録のみ）

「一字奇特佛頂經三卷^{不空}」（大正蔵 55.1103a）

「菩提場所説頂輪王經五卷^{不空}」（大正蔵 55.1103b）

「一字頂輪王念誦儀軌一卷^{不空}」（大正蔵 55.1103b）

「一字頂輪王瑜伽經一卷^{不空}」（大正蔵 55.1103b）

「金剛頂經一字頂輪王念誦儀軌一卷^{不空}」（大正蔵 55.1103c）

「金輪王佛頂要略念誦法一卷^{不空}」（大正蔵 55.1104a）

なお円珍は自ら請来した上記経軌中でも、④『菩提場所説一字頂輪王經』を重んじたようであり、その註釈として『菩提場経所説一字頂輪王經略義釈⁶⁷』全五巻を著し、また年分度者として新たに「一字頂輪王經業」の奏請を行ったと記録される⁶⁸。

◎宗叡（809～884）の請来

宗叡は入唐目録として、咸通六年（865）の『新書写請来法門等目録』（大正蔵 №2174A）、そしてその簡略版ともいえる『禪林寺宗叡僧正目録』（大正蔵 №2174B）という二種が現存している。前者の目録から、

「一字金輪」関係経軌を取り上げると二種が確認される。

「**瑜伽翳迦訖沙羅烏瑟尼沙訖訖羅眞言安怛陀那儀則一字頂輪王瑜伽經儀軌一卷**不空三藏譯四紙長策
字此密意深妙難解」(大正蔵 55.1110b)

「**金輪佛頂母禎子一張一副**」(大正蔵 55.1111a)

前者は①『一字頂輪王念誦儀軌』(大正蔵 №954A) であると考えられるが、後者については不明である。「**金輪佛頂母禎子**」という名称からするならば、何らかの図像資料と思われるが、通常、一字金輪は男性形で表現されるのに対して、仏頂尊勝母 (Uṣṇīṣavijayā) のような女尊を想定しているようで興味深い。

八、まとめ

本稿では、「一字金輪」研究の基礎作業として、中国で編纂された經典目録、および入唐八家による経軌請来の目録を手掛かりとして、「一字金輪」関係経軌がいかに翻訳され伝播したのかを探ってきた。

《**釈迦金輪**》に関する初訳は、宝思惟が神龍元年 (705) に漢訳した①『**大陀羅尼末法中一字心呪經**』(大正蔵 №956) である。そして同時期の景龍三年 (709) には、菩提流志によって『**一字仏頂輪王經**』が翻訳された。『大正蔵經』を見ると、菩提流志に帰せられる『**一字仏頂輪王經**』としては、②『**五仏頂三昧陀羅尼經**』(大正蔵 №952) と③『**一字仏頂輪王經**』(大正蔵 №951) の二種があり、名称にのみ注目をすると③が正統な菩提流志訳と思われる。しかし、同経には、②および④にはない「**大法壇品第八**」が含まれ、その内容は先行する『**陀羅尼集經**』巻一・巻四と酷似することから、中国で編集された經典である可能性が高い。よって經典目録の割注に記される四卷本、すなわち現行では②に該当する經典が訳され、開元十八年 (730) までに「**大法壇品**」が増広され③が成立したものと推測される。

宝思惟と菩提流志による翻訳年次 (8世紀初頭) および活動拠点 (洛陽) は、近接しており、また共通の知人の僧として李無諂という存在が

あることから、両僧には交流があり、影響を与え合う関係であったと推測される。近似する内容の經典が、相次いで漢訳された背景として、宝思惟と菩提流志には、《釈迦金輪》訳出に関する認識や素材が共有されていたものと考えられるが、今後、その背景について探ってゆきたい。

次に不空であるが、その所訳には《釈迦金輪》のみならず、《大日金輪》に関する儀軌が数多く訳されている点に特徴がある。不空は、大宝十二載（753）、④『菩提場所説一字頂輪王経』（大正蔵 №950）、①②『一字頂輪王念誦儀軌』（大正蔵 №954）、③『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』全一卷（大正蔵 №955）の三種を相次いで翻訳した。

その後、しばらく「一字金輪」関係経軌は翻訳されないが、最晩年の大暦六年（771）から入滅の大暦九年（774）に至って、⑤『一字奇特仏頂経』（大正蔵 №953）、⑤『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』（大正蔵 №957）、④『金輪王仏頂要略念誦法』（大正蔵 №948）の四種を相次いで翻訳した。最晩年に至り「一字金輪」の関係経軌を多く翻訳した背景として、皇帝を轉輪聖王・金輪王に擬え、密教による護国を目指した不空の政治的意図が予想される。

以上、取り上げた五経・五儀軌は、確実に中国に存在したものと見える。儀軌に関しては編集的性格の色濃いものであり、中国編纂の可能性が高いが、《釈迦金輪》に関する『一字仏頂輪王経』等の經典は、内容的にインドに遡及しうるものと考えられる。今後、三種の『一字仏頂輪王経』について対照研究を試み、別稿にて成果を述べたいと思う。

中国で翻訳（あるいは編纂）された「一字金輪」の関係経軌は、奈良期・平安期に日本に伝えられ、まず《釈迦金輪》、後に《大日金輪》の順に受容されていった。

奈良期には、まず宝思惟・菩提流志が翻訳した《釈迦金輪》に関係する經典①②③が日本に伝えられた。平安期になると入唐八家によって相次いで「一字金輪」関係経軌が伝えられたが、特に空海は、不空所訳の④および《大日金輪》に関する①②③④の儀軌を体系的に伝えた。不空所訳の儀軌のうち唯一、⑤『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏

儀軌』(大正蔵 №957)のみ、空海の請来の記録はなく、後に円仁・円珍によって請来された。

入唐八家が請来したのものには、中国の經典目録に辿ることができない仏典・図像が含まれており、例えば円行は⑦『奇特最勝金輪仏頂念誦儀軌法要』(大正蔵 №949)を伝えたとして記録される。『大正蔵經』には、「一字金輪」に関係する資料として、他にも⑥『宝悉地成仏陀羅尼經』(大正蔵 №962)、⑥『大日如来劍印』(大正蔵 №864A)、⑧『金剛頂經一字頂輪王儀軌音義』(大正蔵 №958)も収録されるが、これらは中国・日本のいずれの目録にも記載されておらず、その資料の位置付け、扱い方には注意を要する。

本稿での関係經軌の来歴に関する研究を踏まえ、今後いよいよ内容から「一字金輪」および仏頂尊について深く探ってゆきたい。

註

- 1 筆者は、一字金輪の研究の手始めとして、より原初的な性格をもつ「釈迦金輪」に注目し、「釈迦金輪研究序説」(2016年、『転法輪の歩み』:小峰彌彦先生 小山典勇先生古稀記念:『智山学報』63)を発表した。
- 2 一字金輪・釈迦金輪に関する漢訳經軌は多様に存在するにも関わらず、不思議なことに、対応するサンスクリット本、チベット訳は発見されていない。三崎良周も『台密の研究』(1988年、創文社)118頁において、「そして現在、梵本やチベット本には尊勝佛頂や白傘蓋佛頂の經軌は少なからず見出せるのであるが、一字佛頂輪王に関する經軌や陀羅尼は見いだせず、またその報告もないようである」と述べている。

しかし、一字金輪と切り離し、ボロン呪 (*bhrūṃ*) のみに限定するならば、漢訳以外の資料にも言及が見られる。高田順仁『『蘇悉地羯羅經』「真言相品第二」の考察—台密蘇悉地羯羅經觀と三部諸尊の分類—(1998年、『密教学』34)によれば、チベット訳の『蘇悉地經』には、仏部明王の結護の真言として、「*bhrūṃ*」が説かれるという。また、『蕤咽耶經』のチベット訳でも、直接「*bhrūṃ*」が説かれないものの、「佛部の明王は輪王〔佛頂〕の一字〔のマントラ〕であり…」という記述が見られるという。金本拓士・伊藤堯貫『『蕤咽耶經』蔵・漢訳テキスト研究(2)』(1998年、『仏教教理思想の研究 佐藤隆賢博

士古稀記念論文集』)より該当箇所原文を挙げると次の通りである。

ཐུལ་བའི་རིགས་ལ་རིག་ལྟགས་ཐུལ་ཤོར་ལོས་སྐྱུར་བའི་ཡི་གེ་གཅིག། … [6-25]

他にも拙論「『仏頂尊勝母成就法』の研究」(2010年、『智山学报』59)ですでに触れたように、『Sādhanamālā』(成就法鬘)に含まれる *Uṣṇīṣavijayasādhana* では、持呪者が *bhrūṃ* 字を観想し、変じて仏頂尊勝母を成ずることが説かれ、成就法の終わりには、「*oṃ bhrūṃ svāhā*」という心真言が記されている。また拙論「尊勝陀羅尼分類考」(2007年、『大正大学総合佛教研究所年報』29) 134~135頁、149頁で言及したように、乙類の尊勝陀羅尼の前後に、「*oṃ bhrūṃ svāhā*」「*bhrūṃ bhrūṃ bhrūṃ*」等が加句される慣例が存在したようである。上記のような「*bhrūṃ*」の記が直ちに一字金輪と結びつくかどうかは不明であるが、今後、資料範囲を広げて論じることができればと考えている。

- 3 『国訳一切経』[印度撰述部] 密教部5 (1933年、大東出版社)には、阿部宥精による本経の解題・書下し文・校註、また『続国訳秘密儀軌』第6巻 (1975年、国書刊行会)には、佐藤隆賢・遠藤祐純・福田亮成による本経の書下し文・校註が収録される。
- 4 『国訳一切経』[印度撰述部] 密教部3 (1931年、大東出版社)には、神林隆浄による本経の解題・書下し文・校註が収録される。なお三崎良周『台密の研究』(1988年、創文社) 528頁によれば、同経にもとづき作られたものが「五仏頂法」であるという。
- 5 『続国訳秘密儀軌』第5巻 (1975年、国書刊行会)には、福田亮成による本経の書下し文・校註が収録される。
- 6 『国訳秘密儀軌』第23巻 (1973年、国書刊行会)には、吉祥真雄による本経の書下し文・校註、また『新国訳大蔵経』密教部4 (2004年、大蔵出版)には、今井淨圓・松長恵史による本経の解題・書下し文・校註が収録される。
- 7 『国訳秘密儀軌』第23巻 (1973年、国書刊行会)には、吉祥真雄による本経の書下し文・校註、また『国訳一切経』[印度撰述部] 密教部5 (1933年、大東出版社)には、田島隆純による本経の解題・書下し文・校註が収録される。
- 8 『国訳秘密儀軌』第23巻 (1973年、国書刊行会)には、吉祥真雄による本経の書下し文・校註が収録される。
- 9 『国訳秘密儀軌』第23巻 (1973年、国書刊行会)には、吉祥真雄による本経の書下し文・校註が収録される。

- 10 『統国訳秘密儀軌』第5巻（1975年、国書刊行会）には、福田亮成による本經の書下し文・校註が収録される。
- 11 『国訳一切經』[印度撰述部] 密教部5（1933年、大東出版社）には、阿部宥精による本經の解題・書下し文・校註、また『統国訳秘密儀軌』第5巻（1975年、国書刊行会）には、福田亮成による本經の書下し文・校註、そして『新国訳大藏經』密教部6（1994年、大藏出版）には、福田亮成による本經の解題・書下し文・校註が収録される。
- 12 『一切經音義』には、『仏説一字轉輪王仏頂呪經』（大正藏 54.538c、同 542b）という仏頂系經典の名が掲載されるが、詳細は不明である。
- 13 『佛書解説大辞典』第7巻 209頁 b では、菩提流志ではなく、菩提流支（Bodhiruci：生年不詳～527）として『大威徳轉輪王一字心陀羅尼經』全一卷の名を挙げている。同書では、同經について「秘密儀軌集第一」の収録、また享保十二年の写本が現存すると記すが筆者は未見である。
- 14 ㉑『開元録』中の『一字仏頂輪王經』に関する記述箇所は以下である。

「大陀羅尼末法中一字心呪經一卷譯經年終於譯」（大正藏 55.566c）

「大陀羅尼末法中一字心呪經一卷 * 大唐北天竺三藏寶思惟譯新編入録」（大正藏 55.603a）

「大陀羅尼末法中一字心呪經一卷 大唐三藏寶思惟譯」（大正藏 55.669b）

「大陀羅尼末法中一字心呪經一卷一十四紙」（大正藏 55.687b）

「大陀羅尼末法中一字心呪經一卷一十四紙寶思惟譯」（大正藏 55.710c）

- 15 大正藏 55.566c～567a (㉑『開元録』)。この宝思惟の略伝は、㉒『開元釈教録略出』（大正藏 55.732c）、㉓『貞元新定釈教目録』（大正藏 55.867b、同 934c、同 1009b、同 1033c）にも再録されている。

「沙門阿儂真那。唐云寶思惟。北印度迦濕蜜羅國人。刹帝利種。彼王之華胄。幼而捨家禪講爲業。進具之後專精律品。復慧解超群學兼真俗。乾文呪術尤工其妙。加以化導爲心無戀鄉國。以天后長壽二年癸巳居于洛都。勅於天宮寺安置。即以天后長壽二年癸巳。至中宗神龍二年*丙午。於授記天宮福先等寺。譯不空羼索陀羅尼經等七部。後至睿宗太極元年壬子四月。太子洗馬張齊賢等繕寫進內。至延和元年六月。勅令禮部尚書晉國公薛稷右常侍高平侯徐彦伯等詳定入目施行。三藏自神龍二年已後更不譯經。唯精勤禮誦修諸福業。每於晨朝磨香爲水塗浴佛像後方飲食。從始至終此爲恒業。衣鉢之外隨得隨施。後於龍門山請置一寺。依外國法式製造呼爲天竺。已及門人同居此寺。精誠所感其數寔多。壽年百

餘。以開元九年終於寺矣」(大正蔵 55.566c~567a)

- 16 宝思惟は、「證梵文義」の立場で、義浄(635~713)の訳場にも参画した。
「…勅於佛授記寺安置。所將梵本並令翻譯。初共于闐三藏實又難陀翻華嚴經。久視已後方自翻譯。即以久視元年庚子至長安三年癸卯。於東都福先寺及西京西明寺。譯金光明最勝王。能斷金剛般若。入定不定印。彌勒成佛。一字呪王。莊嚴王陀羅尼。善夜。流轉諸有。妙色王因緣。無常。八無暇有暇。長瓜梵志等經。根本說一切有部毘奈耶。尼陀那目得迦。百一羯磨。及律攝等。掌中。取因假設。六門教授等論。及龍樹勸誡頌。已上二十部一百一十五卷。北印度沙門阿儂眞那證梵文義。沙門波崙復禮慧表智積等筆受證文。沙門法寶法藏德感成莊神英仁亮大儀慈訓等證義。成均太學助教許觀監護繕寫進內。天后製新翻聖教序令標經首」(大正蔵 55.568b~c)
- 17 李無諂の略伝については、『開元釈教録』等に下記のごとく記載されている。
「不空羼索陀羅尼經一卷一名普門此有二十六品是梵本經沙門波崙製序第二出與寶思惟譯三卷者同本 右一部一卷其本見在
婆羅門李無諂。北印度嵐波國人。識量聰敏內外該通。唐梵二言洞曉無滯。三藏阿儂眞那菩提流志等。翻譯衆經並無諂度語。於天后代聖曆三年庚子三月。有新羅國僧明曉。遠觀唐化將欲旋途。於總持門先所留意。遂殷勤固請譯此眞言。使彼邊維同聞秘教。遂於佛授記寺翻經院。爲譯不空羼索陀羅尼經一部。沙門波崙筆受。至久視元年八月。將所譯經更於闕寶重勸梵本方寫流布」(大正蔵 55.566b)
- 18 漢字音写のインドの地名については大鹽毒山編纂『印度佛教史地圖索引』(1924年、大雄閣書房)を参照した。「嵐波國」については付録地図のH-5に記載され、「迦畢試屬領」、すなわちカーピシ国(Kohistan)の属領と補われている。
- 19 船山徹『仏典はどう漢訳されたのか—スートラが經典になるとき』75~78頁参照。
- 20 拙論『『陀羅尼集経』の研究—釈迦仏頂の成立をめぐる—』(2005年、『密教学研究』37)では、「双神変」を手掛かりとして、『陀羅尼集経』の記述と、カーピシ・ベグラム地方の「舎衛城の神変」の図像表現が一致することを指摘し、仏頂尊、特に釈迦仏頂の源流を同地と推定した。李無諂が前註18のごとく、カーピシ国の属領である「嵐波國」の出身者であるならば、宝思惟や菩提流志に《釈迦金輪》、広く仏頂尊に関する情報、あるいは原典を供給した可能性も考えられる。その傍証として、李無諂は『不空羼索陀羅尼経』(大正蔵

№1096)を翻訳したことが注目される。拙論「土砂加持原典考—仏頂尊勝陀羅尼の関連資料を中心に—」(2016年、『密教学研究』48)で指摘した通り、不空罽索に関する梵本 *Amoghapāśakalparāja* には、梵本 *Sarvagatipariśodhana-uṣṇīṣavijayā nāma dhāraṇī* をはじめ、多くの『仏頂尊勝陀羅尼經』で説かれる特徴的な儀軌、例えば「土砂加持」や「塔影映身」等の記述を共有することが判明した。現時点では断定はできないが、カーピシに関わる李無諂は、仏頂尊に関する何らかの情報を有しており、単に宝思惟や菩提流志を助け、つなぐ以上の重要な役割があったものと推測される。

- 21 『大正蔵・敦煌出土仏典対照目録(暫定第3版)』(2015年、国際仏教学大学院大学附属図書館)によれば、「一字金輪」の関係経軌は下記の一点のみである。なお三崎良周も、すでに『台密の研究』(1988年、創文社)118頁において、同様の指摘を行っている。

No. 956 (貞元録 No. 501) 『大陀羅尼末法中一字心呪經』1卷 唐 寶思惟譯
315c13-317a6 P. ch. 3916-2 BD6226

* BD = 中国国家図書館の略号。付録に『敦煌宝蔵北番号・BD 番号対照表』を掲載。

- 22 ①『開元録』中の『一字仏頂輪王經』に関する記述箇所は以下である。

「一字佛頂輪王經五卷亦云五佛頂(一經)或四卷唐龍三年夏於西崇福寺譯弟子般若丘多助宣梵本其年冬譯畢」(大正蔵 55.569c)

「一字佛頂輪王經五卷亦云五佛頂經或四卷」(大正蔵 55.603a)

「一字佛頂輪王經五卷 大唐三藏菩提流志 譯」(大正蔵 55.669c)

「一字佛頂輪王經五卷亦名五佛頂經或四卷一百二十一」(大正蔵 55.687b)

「一字佛頂輪王經五卷亦云五佛頂經或四卷二百二十一紙」(大正蔵 55.710c)

- 23 大正蔵 55.569c (①『開元録』)。なお菩提流志の略伝は、②『開元釈教録略出』(大正蔵 55.732c)、③『貞元新定釈教目録』(大正蔵 55.872b、同 872b、同 934c、同 1009c、同 1033c)にも再録されている。他にも『大宝積經』序文(大正蔵 №310 : 大正蔵 11. 1a)、『宋高僧伝』(大正蔵 №2061 : 50.720b)等にも菩提流志に関する言及が見られる。

- 24 ④『開元録』の菩提流志の略伝によれば、その訳経事業に、訳語として李無諂が参加していたことが分かる。

「以長壽二年癸巳創達都邑。即以其年於佛授記寺譯寶雨經。中印度王使沙門梵摩同宣梵本。沙門戰陀居士婆羅門李無諂譯語。沙門*慧智證譯語。沙門處一等筆受。沙門思玄等綴文。沙門圓測神英等證義。司賓寺丞孫辟監護」(大正蔵

55. 570a)

- 25 般若丘多は、密教に精通したインド僧であったと推測される。菩提流志が、神龍二年（706）から拠点とした西崇福寺において漢訳した『不空罽索神變真言經』三十卷の他、『千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經』『如意輪陀羅尼經』『文殊師利寶藏陀羅尼經』『金剛光焰止風雨陀羅尼經』の多くで、般若丘多が「助宣梵本」として関わっており、同寺に所縁の深い僧であったと考えられる。
- 26 『佛書解説大辞典』第3巻278bの「五仏頂三昧陀羅尼經」の項では、同經の翻訳について「唐長壽二年（A.D.693～）」と記している。この記事に由来してかは不明であるが、今井淨圓「仏頂尊に関する研究ノート」（2001年、『種智院大学密教資料研究所紀要』4）や、後に取り上げる木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』でも、㉔『五仏頂三昧陀羅尼經』の訳出年代について長壽二年（693）を挙げているが、筆者が中国・日本の經典目録を精査したかぎり、その典拠が見出せない。

㉔『開元録』では、長壽二年の菩提流志の訳經について「寶雨經」「實相般若」「金剛髻」「大乘伽耶頂」「有徳妙慧」「文殊不思議境界」「妙徳女問佛等經」「譯護命法門」「六字神呪」「般若蜜多那」「不空罽索呪心」「智猛長者問」「除鬼病那耶大陀羅尼」「文殊呪法藏」「一字呪王」「摩尼」「祕密善住等經」「般若六字三句論」（以上、大正蔵55.570a）の19部合20巻となっている（※実際に数えると18部19巻である）。この中では唯一、「一字呪王」が一字金輪を想像させるが、經典の割注には、「今疑與前呪藏共是一經」（大正蔵55.569c）とあり、直前の「文殊師利呪法藏經一卷」と同一本であることが分かる。総合的に判断するならば、菩提流志による「一字仏頂輪王經」の訳出は、景龍三年（709）の一度のみと考えるのが妥当である。

- 27 拙論「釈迦金輪研究序説」（2016年、『転法輪の歩み』：小峰彌彦先生 小山典勇先生古稀記念：『智山学報』65）267頁参照。
- 28 ㉔『五仏頂三昧陀羅尼經』末尾の文では、四卷本は五卷本（㉓『一字仏頂輪王經』）から文言を削除したものと従來說を示した上で、両經を実際に比較し、単なる広略の別ではなく、記事の取捨が大きく異なることを指摘し、両經を併載した理由としている。

「按開元録云。一字佛頂輪王經五卷。亦云五佛頂或六卷。則此四卷本與彼五卷頂輪王經。只是一經而分卷有異耳。又按目録及音義丹本經。皆云五卷無四卷者。則此四卷經宜在削去。然尋其文相。非唯廣略不同。往往互有不可取捨處。

今依郷本雙存」(大正蔵 19.285c)

『国訳一切経』密教部 3 に収録される神林隆浄による解題によれば、特に svāhā の音写漢語をめぐって、③『一字仏頂輪王経』を旧作、②『五仏頂三昧陀羅尼経』を新作とし、特に後者については後人の手が加えられ転訛した可能性を指摘している。

29 不空の生涯については、松長有慶『密教—インドから日本への伝承』(1989年、中公文庫)が最も簡便である他、藤善真澄・塚本孝俊・山崎宏・岩崎日出男・山口史恭等による研究成果がある。

30 千葉照観「不空の密教と金閣寺」(1987年、『印度學佛教學研究』35-2)では、不空が五臺山上に建立した金閣寺は、第一層が文殊菩薩、第二層が金剛頂瑜伽五仏、第三層が頂輪王瑜伽会五仏を祀っており、金閣そのものが仏頂輪王曼荼羅であったと指摘している。なお頂輪王五仏は、④『菩提場所説一字頂輪王経』(大正蔵 №950)のうち、「画像儀軌品第三」に基づく頂輪王・白傘蓋頂王・高頂王・光聚頂王・勝仏頂であると推定されている。

31 ⑥『貞元録』に記載される不空の略伝を参照(大正蔵 55.881a)。

32 山口史恭「中国 中期密教の請来と展開」(2016年、『空海とインド中期密教』) 114頁によれば、哥舒翰の要請を受けた不空は、護国のために『一字頂輪王経』を一部改変して、④『菩提場所説一字頂輪王経』を訳した可能性を指摘している。

33 後に取り上げる『三十帖策子』には、第五帖に「一字頂輪王念誦儀軌」が収められるが、その冒頭が「我今依忉利天…」から始まっており、①『一字頂輪王念誦儀軌』(大正蔵 №954A)と判断される。この点を考慮すると中国において不空が翻訳(編集の可能性もある)した同儀軌は、①大正蔵 №954Aであった蓋然性が高いが、明確な証文がないため、本文中では①大正蔵 №954A と②大正蔵 №954B とを併記した(以下同)。

34 ⑥『貞元録』では、不空による『菩提場所説一字頂輪王経』『一字頂輪王念誦儀軌』『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』の訳出について以下のように記す。

「至癸巳(*+年)天寶十二載。河西節度使御史大夫西平郡王哥舒翰奏。不空三藏行次染患養疾韶州。令河西邊陲請福疆場。上依所請勅下韶州。追赴長安止保壽寺。制使勞問錫賚(*来)重重。四事祇供悉皆天賜。憩息踰月令赴河西。至武威城住開元寺。節度使迎候是物皆供。請譯佛經兼開灌頂。演瑜伽教置(*曼)荼羅。使幕官寮咸皆諮受。五部三密靈往實歸。時西平王爲國請譯金剛

頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經三卷。行軍司馬禮部郎中李希言筆受。又譯
菩提場所說一字頂輪王經五卷。及一字頂輪王瑜伽經一卷。并一字頂輪王念誦儀
軌一卷。並節度判官監察侍御史田良丘筆受。又承餘隙兼譯小經。至十三載甲午
十月使牒。安西追僧利言河西翻譯時…」（大正藏 55.881b）

なお千葉照観の「不空の密教における仏頂尊関係の位置づけ」（1987年、『大
正大学総合佛教研究所年報』9）および「不空の密教と金閣寺」（1987年、『印
度學佛教學研究』35-2）によれば、④『菩提場所說一字頂輪王經』は菩提流志
訳の再治本であり、撰述的であることが指摘されている。

35 円照集『代宗贈司空大弁正広智三藏和上表制集』（大正藏 №2120：表制集）
卷三所収の「三朝所翻經請入目錄流行表一首」（大曆六年十月十二日の上表）。
その冒頭では、玄宗・肅宗・代宗の三朝間における不空の訳経典は、77部101
巻と都目（都部陀羅尼目）1巻であると述べている。

36 大正藏 52.839b～c（©『表制集』）。

37 「大唐不空三藏新譯衆經論及念誦儀軌法等目錄 總一百三卷爲八帙 經目一
卷 三紙 入第八帙」（大正藏 55.699c）

38 「菩提場一字頂輪王經五卷八十一紙 一字奇特佛頂經三卷六十八紙」（大正藏
55.699c）

「一字頂輪王念誦儀一卷十四紙」（大正藏 55.700b）

39 金剛智の訳経に続き、「代宗朝大曆中特進試鴻臚卿大廣智不空三藏奏。玄宗
肅宗今上以來三朝所翻經。總七十七部。共一百一卷。并都目一卷」として不空
訳を出す。

「奇特佛頂經三卷 六十八紙」（大正藏 55.748c）

「菩提場所說一字頂輪王經五卷 七十八紙」（大正藏 55.749a）

「一字頂輪王瑜伽經一卷 六紙

一字佛頂輪王念誦儀軌一卷 十二紙」（大正藏 55.749b）

40 「大曆九年六月十五日開府儀同三司肅國公三藏沙門大廣智不空上表」（大正藏
55.754c）

41 大正藏 55.753c（④『統開元録』）。

42 大正藏 55.754a（④『統開元録』）。

43 不空の訳経について、「代宗朝大曆七年。特進試鴻臚卿大興善寺大廣智不空
三藏奏。玄宗肅宗今上三朝已來。所翻譯經論。總七十七部。共一百四十一卷。
并都目一卷。具列如左」（大正藏 55.766c）と述べた後、「一字金輪」の経軌と

して以下を挙げる。

「奇特佛頂經三卷經内題云一字奇特佛頂經現威佛品六十八紙」(大正蔵 55.766c)

「菩提場所説一字頂輪王經五卷 七十八紙」(大正蔵 55.767a)

「一字頂輪王瑜伽經一卷經内云瑜伽師沙羅摩尼沙祈囉真言安陀那儀軌一字頂輪王瑜伽經六紙

一字佛頂輪王念誦儀軌一卷經内題中無佛字十二紙」(大正蔵 55.767c)

「金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌一卷 八紙」(大正蔵 55.768b)

「金輪王佛頂略念誦法一卷 三紙」(大正蔵 55.768c)

44 『密教大辞典』では、「一字金輪」の梵名について Ekākṣara buddhoṣṇīṣa cakraḥ とするが、これは③『一字頂輪王瑜伽觀行儀軌』(大正蔵 №955)に関する④『統開元録』の割注を参照し、復元した梵語と推定される。ただし「仏頂」の漢訳語に合わせて「buddha」を加えるといった恣意的な操作もなされており注意が必要である。

45 ⑤『貞元録』では、第一(大正蔵 55.772a~773b)、第十五(大正蔵 55.879a~.881a)において不空の訳経のリストを挙げている。また第二十二(大正蔵 55.931b~)・二十七(同 55.1011c~)・二十九(同 55.1031c~)においても、「一字金輪」の関係経軌名が記載される。

46 ⑥『一切経音義』の成立年次については、『大蔵経全解説大事典』627頁参照。

47 三崎良周『台密の研究』119頁では、⑦『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌』と⑧不空『宝悉地成仏陀羅尼經』を挙げて、「これらの經典によって、初めて一字佛頂輪王が一字金輪王と合一されるわけで、後の日本の台密・東密の雙方に用いられて來るわけである」と述べている。

48 山口史恭「不空三蔵の『大乘密嚴經』再訳について」(2011年、『密教学研究』43)、同「代宗の灌頂受法と普賢結縁について」(2015年、『密教学研究』47)、同「中国 中期密教の請來と展開」(2016年、『空海とインド中期密教』109~124頁、第三章)参照。一連の研究において、不空は永泰元年(765)に『仁王經』『密嚴經』を再訳する時、護国要素を取り入れるとともに、皇帝=転輪聖王を規定していった可能性が指摘されている。

49 木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(國書索引叢刊3)は大日本古文書正倉院文書全二十五卷、寧楽遺文全三卷、続日本紀の経律論疏名索引をもとに簡略な解説を付して作成された索引である。

50 『奈良朝典籍所載仏書解説索引』290頁。「大陀羅尼末法中一字経」の項では、正倉院文書⑨ 381、同⑩ 166・198、また「大陀羅尼末法中一字心呪経」の項では、同⑦ 74・111、同⑩ 281・325、同⑫ 87・125・446・495、同⑬ 131、同⑯ 468、同⑱ 343、同㉑ 38・101、同㉒ 542、同㉓ 397を挙げる。

51 『奈良朝典籍所載仏書解説索引』104頁。「五仏頂経」の項として正倉院文書⑫ 125、同⑱ 388、また「五仏頂三昧陀羅尼経」の項で同⑦ 62、同⑰ 32・70、同⑳ 166・205、同㉒ 542、同㉓ 397、そして「五仏頂輪王経」（四卷）の項で同⑲ 381、同⑳ 213を挙げる。なお同書中の解説では、㊦菩提流志『五仏頂三昧陀羅尼経』の訳出年代として唐長寿二年（693）を挙げるが、その典拠は不明である。

52 『奈良朝典籍所載仏書解説索引』17頁。正倉院文書⑩ 281・325、同⑫ 87・446、同⑬ 131、同⑯ 171、同㉑ 37・101を挙げる。

53 「五佛頂法一」では、「五佛頂轉輪王經五卷^澄」「梵字五佛頂眞言一本^仁」「五佛頂法訣一卷^{忠和上集}」（大正蔵 55.1118b）、また「金輪佛頂法三」では「金輪王佛頂略念誦法一卷^{不空譯貞元新入目錄圓覺海仁譯}」「奇特最勝金輪佛頂儀軌法要一卷^{蓮仁行無}」「金輪佛頂抄一卷^蓮」「遍照佛頂等眞言一卷^仁」「金剛頂瑜伽佛頂心眞言一卷^蓮」「熾盛佛頂威徳光明眞言儀軌一卷^仁」を挙げている。

また「一字佛頂法四」では、「一字佛頂輪王經五卷^{亦名五佛頂經或四卷圓覺梵釋云一字佛頂輪王經四卷又名五佛頂經或五卷貞元私云此一重出}」「菩提場所説一字頂輪王經五卷^{不空譯貞元新入目錄海仁譯圓覺}」「奇特佛頂經三卷^{内云一字奇特佛頂經現成碑品不空譯貞元新入目錄圓覺海仁譯云一字奇特佛頂經三卷}」「一字頂輪王瑜伽經一卷^{内云瑜伽鬘迦訖沙羅烏瑟尼沙斫訖羅眞言安但那儀則一字頂輪王瑜伽經一卷}」「一字頂輪王瑜伽經一卷^{海仁譯}」「瑜伽鬘迦訖沙羅烏瑟尼沙斫訖羅眞言安但那儀則一字頂輪王瑜伽經一卷^{不空譯貞元新入目錄圓覺}」「大陀羅^(*)末法中一字心呪経一卷^{貞元梵釋}」「大陀羅尼經一卷^澄」「金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成佛儀軌一卷^{不空譯貞元新入目錄仁譯}」「一字佛頂輪王念誦儀軌一卷^{不空譯貞元新入目錄圓覺}」「一字頂輪王要法別行一卷^仁」「一字頂輪王印一卷^澄」「一字梵字一卷^澄」「梵字一字頂輪王儀軌一卷^{(*)海}」「梵漢兩字一字呪王陀羅尼一卷^{(*)海}」（大正蔵 55.1118b~1119a）の名が挙げられている。

54 本目録は、最澄が中国台州滞在時に書写・収集した仏典の目録であり、天台学関係のものが主体となっている。同目録中には、一字金輪に関する経軌名はないが、梵漢両字の資料として「大佛頂陀羅尼」「佛頂尊勝陀羅尼」、また「大佛頂通用曼荼羅」という仏頂系の経軌を将来したと記される。

55 中田法寿「三十帖策子の原本と其の目録」（1935年、『密教研究』55）、眞保龍敞「三十帖策子」原型の輪郭について」（1966年、『印度学仏教学研究』通

号 29) 等を参照。

- 56 『大正藏經』第五十五卷の『根本大和尚真跡策子等目錄』には、「一字金輪」関係資料として、「一字頂輪王念誦法一卷^{不空譯}」(大正藏 55.1066a)、「一字頂輪王瑜伽一卷^{不空譯 後類云一字頂輪王瑜伽究竟儀軌一卷}」(大正藏 55.1066a)、「一字奇特佛頂經三卷^{不空譯}」(大正藏 55.1066a)、「菩提場一字頂輪王經一部五卷^{不空譯 攝有 譯淨等胎藏界諸尊 真言菩薩護摩真言金剛歌頌等}」(大正藏 55.1066b)、「金輪王佛頂要略念誦法一卷^{法采通譯}」(大正藏 55.1066c)、「梵字一字頂輪儀軌」(大正藏 55.1068a) の名が収録される。
- 57 『定本弘法大師全集』第 3 卷 17 頁。即身成仏の証文は、「二經一論八箇の証文」と称されるが、そのうち『金剛頂經』からの証文として、⑤『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』(大正藏 №957) から「修此三昧者 現證佛菩提」(大正藏 19.320c) が引用されている。
- 58 空海に関する目録類に、⑤『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』(大正藏 №957) の名が見えないことは、古来より問題になってきたようである。例えば、親尊は建長八年(1256)に『録外經等目錄』(大正藏 №2175)を記したが、その中で「^海請來録外^{并所學外}」として同儀軌の名称を挙げ、最後の割注で「弘法大師^云外或云疑」と述べている。近年でも大久保良峻『台密教学の研究』(2004年、法蔵館)307~310頁において、同儀軌が引用される点に注目して、『即身成仏義』の空海真撰について疑問を呈している。
- 59 ②『一字頂輪王念誦儀軌』(大正藏 №954B)は、「我今説無比力超勝世間出世間眞言上上」(大正藏 19.310c)から冒頭が始まるが、儀軌名の下に割注で「依忉利天宮所説經譯」と補われており、①大正藏 №954A と断定しきれない要素もある。次に取り上げる恵運請来も同様である。
- 60 承和六年(839)、唐の開成四年(839)に記された中国・揚州で収集した仏典・曼荼羅の目録である。
- 61 承和七年(840)に、中国・揚州で収集した仏典の目録である。
- 62 『入唐新求聖教目錄』(大正藏 №2167)には、「一字金輪」関係資料ではないが、中国の經典目録に記録されない「大佛頂廣聚陀羅尼經五卷」(大正藏 55.1080a)が収録されており注目される。
- 63 唐の大中七年(853)。中国・福州開元寺で収集した仏典の目録である。
- 64 唐の大中八年(854)。福州の開元寺・大中寺、温州の横陽県張徳真の宅、台州の安寧寺・開元寺、天台山の国清寺で収集した仏典の目録である。
- 65 大中九年(855)、長安の青龍寺で法全から授けられた仏典の目録である。

- 66 唐の大中十一年（857）。各地をめぐり、天台山国清寺に至るまでに収集した
仏典の目録である。
- 67 『智証大師全集』（1918年、園城寺事務所）中巻723～900頁、および『大日
本佛教全書』（書目№70、1970年、鈴木学術財団）15（経疏部15）205～280
頁所収。
- 68 木内堯央『天台密教の形成—日本天台思想史研究』（1984年、溪水社）
337～344頁参照（「一字頂輪王経業」の項）。円珍は帰朝後の仁和三年（887）、
光孝天皇（830～887）の病氣平癒を祈り、その恩賞として年分度者を請い、大
日経業とともに一字頂輪王経業を設けたとされる。

また円珍は、④『菩提場所説一字頂輪王経』について「真言の枢機、法城の
門戸」と述べ、『大日経』『金剛頂経』と同等と評したとされる。なお円珍は、
菩提流志の訳経について、筆者と同様、②『五仏頂三昧陀羅尼経』を旧訳、③
『一字頂輪王経』を別本・別訳と考えていたようである。

なお三崎良周『台密の研究』524～529頁（「佛頂尊と金輪ボロン」の項）で
も、円珍の『菩提場経所説一字頂輪王経略義釈』、また一字頂輪王経業につい
て考察がなされている。

〈キーワード〉 一字金輪・宝思惟・菩提流志・不空・入唐八家